

首都東京のベッドタウン的な役割を果たしながら発展してきた千葉県は、昭和58年6月「千葉新産業三角構想」を打ち出し、これまでの東京依存型から脱却し、自立した生活圏・経済圏・文化圏の確立を目指しました。成田市・千葉市・木更津市の3市を核都市とし、本市は物流の拠点となる国際文化都市として位置付けられました。

4期目を迎えた長谷川市政は、21世紀に向けてのまちづくりを推進するため、昭和59年には「成田地域住宅計画」(H O P E計画)や「成田市総合計画」を策定。住環境を最優先とした新しい住宅建設事業が進められました。



新しいまち
(昭和58～61年)

21世紀にふさわしいまちづくりを目指し

— 伝統が息づく街並み・日本の表玄関としてのまちづくり —

住民意識調査を実施
夢のあるまちづくりを

市民生活の現状と市民が望む成田の将来像を把握するための「21世紀の成田を考える住民意識調査」



21世紀を担う子どもたちへ

と、市民が住まいづくりやまちづくりに対してどのような考えをもっているのかを知るためのアンケート調査が、昭和58年10月と12月に実施されました。前者は市民5,000人を、後者は市街化区域内の市民1,850人を対象に行われ、この二つの調査は、のちの21世紀初頭を展望した「基本構想」や「成田H O P E計画」策定の基礎資料となりました。

暮らしやすいが72%
ほしい施設は

総合病院や映画館・劇場

調査の結果、地域の安性・衛生・快適さ・便利さ・公共施設など総合的な生活環境は、72%の人が概ね暮らしやすいと評価するものの、自然は豊かだが街並みの美しさ、交通の利便性、防犯には不満という声が多く寄せられました。市内にほしい施設は、第1位が地域に関係なく総合病院、次に映画館・劇場、大学の順でした。

一方、各地域に望む施設となると、成田・中郷・久住地区では子どもの遊び場・児童公園、公津・八生地区では下水道整備、豊住地区は市民課分室、遠山・ニュータウン地区では商店・マーケットの要望が高い数値を示しました。

成田H O P E計画
第1号は宗吾台地区

H O P E計画とは、だれもが住んでみたい、これからもずっと住んでみたいと思うまちづくりを目指した、未来のまちづくり計画の



ホープ計画第1号となった宗吾台の街並み



安らぎのある住宅街(公津の杜)

こと。この計画の第1号となったのが宗吾4丁目の宗吾台。その後この計画の趣旨を取り入れまちづくりを進めたのが本城台、美郷台、公津の杜でした。
新しい住宅地では、落ち着いたある美しく統一感のある、質の高い住宅環境を実感させるものでした。また、表参道では、門前町の景観や風情を損なわないような伝統的な色調を取り入れるなど地域の特性を生かしたまちづくりが図られることになりました。

生まれ変わる街
新しいふるさとになる街

快適な生活環境



街並み景観賞を受賞した美しい公津の杜駅

市内では、昭和55年から60年代初頭にかけて、JR成田駅西口（団護台・馬橋・新町）、成田第一（郷部・美郷台）、公津東（公津の杜）の三つの土地区画整理事業が着手されました。

JR成田駅西口周辺は、高低差約20mもある起伏に富んだ地形の中に集落が密集していました。造成工事に着手したのは、昭和55年。その後急速に事業は進み、61年の3月には駅前に西口広場が完成し、ようやくニュータウンと市街地が直結され、成田の西の玄関口にふさわしい新しい街に生まれ変わりました。

成田第一は昭和60年、公津東は61年の着工。いずれもホープ計画の精神に基づいて計画された新しい街。メインストリートには、気軽に立ち寄れる店舗や大小のビルが建ち並び、その周辺に1戸建て住宅と公園・多目的広場などが配置されています。明るく、緑豊かで、美しく調和のとれた住宅都市が形成されています。

西の玄関口となった
JR成田駅西口広場



現在のJR成田駅西口周辺

造成前のJR成田駅西口
周辺（昭和58年ごろ）

